

今後めざすべき方向と課題

北里大学名誉教授・小児腎疾患総合管理研究所 所長

酒 井 糾

1998年10月新横浜で小児腎疾患総合管理研究所を立ち上げ、電子メールによる医療相談をはじめ約15年が経過した。その間、目から鱗が落ちる様な経験も数多く、自分自身、医療支援の在り方について深く考えさせられた。予防医学と臨床医学の違いは、表1に見られる基本理念に示すごとく、予防医学では生き方支援に力点が置かれている。これを今後実践していくには、プロフェッショナル・オートノミー（職業的自律性）の変容と考えられる。専門職としての対話への姿勢、共有する意思決定の仕組みづくり、そして、医療側、患者側の医療リテラシーの日常的更新の必要性があると考えられている。医療最前線でのクライアントとの丁寧な対話を重視しなければならない。

正確で合理性のある医療情報の保持者（専門職自律性）として、クライアントのために的確な情報を伝えていくことが求められている。特に、情報提供や的確な医療機関を紹介するなどの役割を果たすことが極めて大切となる。これはまさしく国民への矜持であり、専門職としてのプロフェッショナル・オートノミーそのものである。

初代ドイツ大統領ヴァイツ・ゼッカーはその演説の中で表2に示すごとく、「過去を振り返ることは、

未来に対して責任をもつことだ」と述べ、さらに「過去へのこだわりを捨てれば未来へのパスポートが得られる」と述べている。雑誌JAMAの編者ロクサーヌ・ヤング氏は、「医師は専門家としての生涯をそのアートを実践することに他ならない」と述べた。岡山大学病院長榎野博史先生は、医学の父ヒポクラテスの有名な言葉、「Ars longa, vita brevis」つまり、Arsとは英語でArtで日本語では芸術と訳されているが、このArsは医学・医術・医道の一つにまとめたものである。医師には医学的なことのみでなく、幅広い教養が必要であるとの教えであると紹介された。

このように、学校検尿にあっても、先人の言葉を活かすべく医療における社会性を理解し、今後への医療職にとって必要不可欠な矜持を持たねばならない。私の学校検尿に対する期待として最後に次の言葉をお示ししておく。

- ・プロ意識をもつこと・フロネシス（アリストテレスの言葉）を備えること、すなわち賢慮を育成する能力、善悪の判断基準を持つ能力、実践的知識の知恵化、こうしたことが医療従事者全てに求められるものと考えている。

表1 臨床医学と予防医学の違い

臨床医学		予防医学
自覚有症状者	対象	基本的無症状者
病歴重視	問診	生活歴重視
有病診断(病気の診断)	診断目的	未病診断(生活の診断)
疾病識別値	検査値の読み方	健康識別値
専門細分化分子レベルの分析学	方法論	生活背景も踏まえた総合学
医療者主導(medicare)	治療	受診者(生活者)主導(self-care)
苦痛の軽減・除去	基本理念	生き方の支援

小山和作「予防医学事業のこれまでとこれから」、『よほう医学』No.477

表2

過去を振り返ることは
未来に対して
責任をもつことだ

初代統一ドイツ大統領
ヴァイツ・ゼッカー

過去15年電子メール医療相談を続け、自分なりにこれからの医療におけるナラティブ・インテリジェンスがいかに大切であるか、特にクライアントのストーリーテリングを親身になって聞く事の大切さ、こうしたことが医療そのものがアートであり、一つの文化であると確信できた。発表の機会を与えていただいたことに深謝したい。